

# 月林寺々報

「正信偈」のはなし

普放無量無辺光  
無碍無対光炎王  
超日月光照塵刹  
一切群生蒙光照  
十二のひかりはな  
てはあまたのくに  
を照します生きと  
しいくるものすべて  
ちにあり。このみひかりのう

わわたしたちの如来さまは、はかり知れない親  
のいのち（無量寿）のなかに抱き取ろうとはたら  
いてくださる如来さまであるとともに、また、き  
わもない光（無量光）でもつて、照しつゝけ、光  
の中に攝め取つてくださる如来さまです。

信偈には、十二の光に集約してあげられています。  
無量光・無辺光・無碍光・無対光・炎王光・清  
淨光・歡喜光・智恵光・不斷光・難思光・無称光  
超日月光の十二の光です。

いまこの正信偈のご文のところを、わかりやすく  
申しますと、大体つきのような意味になります。

「私たちの如来さまは、あまねく光をはなつて  
十方の世界をお照しくださいます。その如来さま  
の光は、いつ、どんなときにも、また、私がどこ  
にどうしているときにも、どんなものにも邪魔さ  
れることなく、それはたとえばすべての障害を焼  
きつくす炎の王のように、光明の中の最尊第一で  
あります。怒り腹立つ心を破つて歓喜（よ  
ろこび）を与えてくださいます。自分の姿さえ見  
えなかつた私の目を開いてくださる智恵の光です。  
い、月の光日（の光）にも超えたそんな光です。いま  
如来さまは、そんな光で、あらゆる國のあらゆる  
人々を、のがさずに、その光の輪のなかに攝めと  
られます。それが私の如来さまです。」

親聖人さまは、如来さまのことを、いつも帰命尽十方無碍光如來」とよんでおられました。それは、「これほど、どうにもこうにもならない私の罪業をうち破つて、ここまで導き育てくださつた不可思議な光の如来さま」ということからです。

私は中学（本山立の中学校）一年のとき、仏教の定期考査を病氣で欠席しました。二三日後登校した私に、T先生が特別に試験をしてくださいました。お經の本のある所を示して、こゝを読みといふことでした。私は、今まで見たことも聞いたこともないお經でしたから、もう最初からこれはだめだと思いました。

お經の本と読みはじめました。ところが、自分でも不思議なぐらいスルスルと読めていくのです。先生も本人の私も、まったくあつけてとられてしまいました。

その読ませたお經の部分というものは、ずっととあとでわかつたのですが、「大無量寿經」の成就文といふところであつたのです。

それから長い間、極く最近まで、時々その時のことと思い出して、「見たとも聞いたことでも、もちろん習つたこともないあの部分を、どうしてあのとき、あゝもスラスラ読めてしまつたのだろう」と心のなかで不思議に思つていたことでした。

最近、ある人から、「あなたのおかあさん（私の十歳のとき死にました）は、平素から、大無量寿經さまは、私の親の願いが書かれている大事なお經。そのなかでも、親のよび声のなかでもう落しはしないと、私をしつかり抱きかかえた親のところが述べられてあるこの成就文がなんとしても有難いと、人にもさかんに読むことをおすすめでした。」といふ話を聞きました。

最近読んだ本（Tバーニー「胎児は見ている」）によると、最近の医学測定技術によると、胎生三ヶ月を過ぎると、胎児の脳の中に記憶した痕跡のようなものが時たま現われ始める。研究者のなかには、胎児は胎生六ヶ月から記憶することができるという意見の人もいるし、少くとも八ヵ月にならなければ、胎児の脳に記憶

する能力は備わらないと主張する人もいる。しかし、胎児が記憶し、その記憶を留めておくことができるということだけは疑いない」ことが明らかになつたとして、そのたくさんの例一生まれ出でしかも大きく成長してから、なんらかのかたちで胎児のときの記憶がうかんてくるのがあげられています。

ありました。

人生の  
すばらしさ。  
いつ死んでも安心ないの  
ちを

精いっぱい大切に生きる

かくら  
おもひ  
どうぞよ  
おもへば  
おもへ

親聖さまもいま、おのれの深重な罪業を思う  
につけ、そこにはたらいてくださる如来のなみ  
なみでない光を、あおがすにはおられなかつた  
のでしよう。

勝林寺

代表役員

佛教青年会

佛教婦人会



人となつて  
生れた私が  
人となつて  
死ねるか

田横宮坂永宮大谷平龜田中永兼宮玉西池  
中山森島本井島石垣野井中井島井井島井池  
美しす 美 千正逸 保幸有貞正清秀 菲俊  
和千代敏重 子枝の子子滋勉秋和雄稳孝夫男隆雄規三歳 匠



## 二命日法要



亡くなつたおうちの方をご縁にしてつとめる家庭の法要には次の三つがあります。

- (1)月忌法要 (2)祥月法要 (3)年忌法要  
これら法要のおつとめの仕方は、地方や家によつて違います。私たちのこの地方では、(1)と(2)と(3)は家庭内でおつとめし(3)の年忌法要には住職をお願いし親類縁者を招いておつとめするのが一般的です。

なんのために

ですから、法事をつとめる場合は、何をおいでも「開法」を中心と考えなければなりません。一人でも多くの人に「開法」してもらえるよう日をえらびたいものです。

突然にこの世を去つた若いわが子が、身をもつて教えてくれた人生無常のことわりを、わが身のうえに思いつつ、あらためてお念佛のおいわれを聞かしていただきたいのです。

二〇三〇年 五十回忌  
(以下五十年ごと)  
このほか二三、二七、三五、三七などと七・五・三のつく年次につとめる地方もあります。

年忌法要にあたつては、お仏壇はもちろん打

鼓をかけ五具足とし、もち・菓子・くだものお

供えをします。

住職となるべく早く日どりを相談して決め、親戚縁者にも早く招待しておきます。

当日のおつとめは三部経の中のいずれか一巻があります。「正信偈」がそえられる場合もあります。

住職の心いつぱいにもてなすべきですが、華美な虚礼は慎しみたいものです。虚榮のための法事ほど心わびしいものはありません。

読經の後、必ずお説教を聴聞します。先に申しましたように、このことがいちばん大切なことです。

その後の「おとき」は、お参りいただいた方へお礼の心いつぱいにもてなすべきですが、華美な虚礼は慎しみたいものです。虚榮のための法事ほど心わびしいものはありません。

年忌法要にあたつては、お仏壇はもちろん打

鼓をかけ五具足とし、もち・菓子・くだものお

供えをします。

年忌法要にあたつては、お仏壇はもちろん打

鼓をかけ五具足とし、もち・菓子・くだものお

供えをします。